

令和元年6月17日現在

機関番号：82621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02356

研究課題名(和文)70ミリ映画のアーカイブにむけた基盤形成

研究課題名(英文)A Basic Research for Archiving 70mm Films

研究代表者

富田 美香(Tomita, Mika)

独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・企画課・主任研究員

研究者番号：30330004

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はその目的を、日本ではほぼ実見不可能となってしまった70ミリ映画を対象に、その受容文化史を明らかにするとともに、70ミリ映画の上映および永続的な保存と再現を可能とするアーカイブの基礎を築き、媒体固有の芸術表現の再現を取り戻すことにおいた。
3年間の研究期間で、70ミリ映画館の分布状況に加え、日本人監督による劇場公開70ミリ映画作品とその現存状況を明らかにし、また、70ミリ映画の保存および上映に必要な機器・体制の整備、そして上映会の実施までを行うことができ、研究目的を概ね達成することができたといえる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

圧倒的な高精細映像を誇る70ミリフィルムは、現在でも映像の質にこだわるハリウッドの映画作家たちが好んで使う記録媒体であるが、日本では上映設備体制が失われ、映画作品のオリジナル表現を検証すること自体が不可能に陥っていた。本研究成果の意義は、第一に70ミリ映画を欧米と同等に受容できる映像文化状況を国内に形成しなおしたこと、第二に活動を通して国内外の映画研究・アーカイブの組織間連携を進めたこと、第三に黒澤明の『デルス・ウザーラ』など日本人監督による70ミリ作品を消滅の危機から救出し、最適な保存体制を構築したこと、そして70ミリ映画の芸術的特質や文化的意義を社会的に発信できたことにあるといえる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research was to clarify the Japanese history of 70mm films which had become almost impossible to see in Japan, and to form an archive for the screening and preservation of 70mm films.
In a three-year research period, I clarified the distribution of 70mm film theaters in Japan, 70mm films directed by Japanese directors and the conditions of the original films. Furthermore, this research established the apparatus and the system necessary for preserving and screening 70mm films.

研究分野：映画史

キーワード：映画史 アーカイブ フィルム 70ミリ映画 大型映画

1. 研究開始当初の背景

標準フィルムに対し1コマあたり4倍の記録面積を有する70ミリフィルムは、圧倒的な高精細映像を誇り、1950年代の全盛期から現在でも尚、映像の質にこだわるハリウッドの映画作家たちが好んで使う記録媒体である。70ミリ映画とその文化の保存と研究については、欧米の映画アーカイブやアート系の映画館が70ミリフィルムで上映する映画祭や特集上映、ワークショップを毎年開催して推進しており、70ミリ映画の特質と歴史をまとめた大著 Gabriele Jatho, Gert Koshofer, 70mm: Bigger Than Life (Bertz + Fischer, 2009) や、過去から最新の IMAX までを含めた世界各地の70ミリ映画の全情報を集約・発信するウェブサイト「70 mm.com」 <http://www.in70mm.com/index.htm> など、必読の先行研究も編まれている。

他方、日本では70ミリ映画は、田中純一郎の『日本映画発達史』を筆頭に多くの映画史でも特筆されるトピックではあるが、ワイドスクリーン映画や大型映画の一種として、イベント性やアトラクション性に還元されるなど、その特質や文化的な考察が十分なされていない。研究分野においても、70ミリというフィルムの規格に着目した研究は多いとは言えない。

その結果、本研究を申請した2015年当時は、日本の映画上映施設から70ミリ映画上映の設備体制が失われてしまい、70ミリ作品のオリジナル表現を検証すること自体が不可能な状態に陥っていた。しかしながら、日本で唯一の国立のフィルムアーカイブである東京国立近代美術館フィルムセンター（現・国立映画アーカイブ。以後、NFAJ）には70ミリ映画の映写が可能な映写機があるなど、未だ日本で70ミリ映画の上映環境の再構築も含めた文化保存と研究を行うことが可能となりえる状況ではあった。また申請者が所属を同館に移し、その事業推進の主任研究員となったことから、70ミリ日本映画作品のフィルムの保存と復元、70ミリ映画の上映を可能とする文化保存と普及に必要な、環境の調査と整備及び実施までを行う研究を推進することが可能な状況ともなった。

上記の経緯から、本研究は、危機的状況に瀕している70ミリの日本映画作品と文化の救出を第一義に、並行して映画史の再検証、映像表現・フィルム技術の研究を推進すべく、申請を行った。採択をうけて、同館のフィルムアーカイブ活動としても本研究を開始することとなった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、国内ではほぼ実見不可能となった70ミリ映画とその文化について、以下(1)から(4)の調査を通して、最適な保存と上映、復元方法を明らかにし、日本における70ミリ映画文化の永続的な保存と再現を可能とするアーカイブの基礎を築くことにおいた。

(1) 対象作品のフィルム情報

目的：最適な保存と上映、復元方法を追求することが望ましい作品として、日本人が監督した70ミリ劇映画の下記4作品を対象に、以下とを明らかにすること。

対象作品：三隅研次『釈迦』（大映、1961）

田中重雄『秦・始皇帝』（大映、1962）

小森白『太平洋戦争と姫ゆり部隊』（大蔵、1962）

黒澤明『デルス・ウザーラ』（ソ連、黒澤プロ、1975）*ソビエト映画

これらのネガフィルムおよびポジフィルムの所在

それぞれのジェネレーションと損傷・欠損・褪色などの劣化状態

(2) 日本における70ミリ映画文化史

目的：1950-1970年代に国内で製作・上映された70ミリ映画について、以下からの概要を明らかにすること。

外国映画も含めた受容の様態

作品情報や製作機材、製作過程などの様態

上映館や映写機などの上映の様態

(3) 欧米での70ミリ映画文化の保存と受容の現状

目的：日本で70ミリ映画の上映環境を再構築するために必要な以下とを明らかにすること。

海外に現存する上映可能な70ミリフィルムの状況

70ミリフィルムの保存から映写までに必要な機材・機器

(4) 日本国内での70ミリ映画文化の保存と受容にむけた課題

目的：上記(3)の調査もふまえ、現在の日本で現実的に導入可能かつ最適な方法として以下からを明らかにする。

70ミリ映画フィルムの最適な保存法（検査や保存の機器含む）

映写に必要な機器や環境

(1)の対象とした70ミリ作品の復元方法

上記をふまえ、国内に現存する70ミリ映画について、保存体制を整え、上映環境や復元方法についての基本的な提言をまとめること、そして本研究の終了時には、70ミリフィルムによる70ミリ映画の上映が日本国内で再現できる状況を形成することを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、前項の目的を達成するために、三つの研究方法 文献調査、70ミリ映画の保存および上映のエキスパートといえる海外機関や団体の現地視察及びヒアリング調査、上述の

4 作品の権利関係者・組織との協力体制による分担調査 をとった。

具体的に、前項の(1)および(4)については、日本の映画文化の保存と研究の中心的組織であるNFAJの映画室を中心としたスタッフに協力を依頼し、同館所蔵の70ミリフィルムについての状態調査をはじめ、フィルム検査と保存に必要な機器・体制の洗い出しとそれらの整備、同館での70ミリフィルム映写に必要な機器・備品の整備と準備、そして70ミリフィルムの試行的上映の実施までをすすめる方法をとった。また、(1)の対象作品である『釈迦』と『新・始皇帝』の権利やフィルム所有者である株式会社KADOKAWAには、同作のネガフィルムおよびポジフィルムの所在、それぞれのジェネレーションと損傷・欠損・褪色などの劣化状態についての調査を依頼した。(3)については、70ミリ上映の現地視察やヒアリングを含めた調査として、国際フィルム・アーカイブ連盟の会員であるノルウェー映画協会が隔年開催している70ミリ映画祭をはじめ、ロンドンで70ミリ映画の常設館として活動しているプリンス・チャールズ劇場、ハリウッドで70ミリ映画を上映しているアメリカン・シネマテークのエジプシャン・シアター、IMAX70ミリの上映館などを主な対象とし、現存する上映可能な70ミリフィルムのプリント状態、70ミリフィルムの保存から映写までに必要な機材・機器についての情報収集をおこなうこととした。(2)については、同時代の映画および映画技術の雑誌、新聞などの文献調査を行うこととした。

4. 研究成果

第2項の(1)から(4)ごとに研究成果を記す。

(1) 対象作品のフィルム情報

『釈迦』『秦・始皇帝』『デルス・ウザーラ』『太平洋戦争と姫ゆり部隊』のうち、映写可能な70ミリポジフィルムの確認ができた作品は『デルス・ウザーラ』のみであり、残りの3作品については70ミリプリントは失われ、35ミリポジフィルムが現存プリントと思われる。オリジナルネガフィルムの損傷、欠損、褪色などの劣化状態も含めた詳細な状態調査は、研究協力者の協力により『釈迦』について行うことができた。同様の調査は、オリジナルネガフィルムの現存を確認できている『デルス・ウザーラ』についても可能な限り進める努力を行ったが、権利者である旧ソビエトの機関からの回答待ちの状態である。『秦・始皇帝』『太平洋戦争と姫ゆり部隊』のオリジナルネガフィルムについては現在も探索中であるが、現存するプリントやDVDソフトの状態から、35ミリポジプリント用のデュープネガの現存確認にとどまると思われる。

本調査で最も重要な日本映画の70ミリ映画第一作にあたる『釈迦』について、そのオリジナルネガの詳細な調査から判明したことは、褪色の度合いは補正可能な範囲で、フィルムの劣化度も現時点での復元利用には耐えられる程度という一方で、オリジナルネガからポジプリントを作成した時のカラータイミングやF.O./F.I.などのオプティカル処理に関する情報 いわゆる現象所での処理情報 が残っていないこと、音ネガが劣化のため使用不可能な状態になっており、復元には後年作成したバックアップ素材を使用する必要があること、という深刻な課題である。これらは、『釈迦』とおなじスーパーテクニラマ70方式で撮られた『秦・始皇帝』『デルス・ウザーラ』『太平洋戦争と姫ゆり部隊』にも共通する課題と思われる。本調査をふまえ、(4)の課題となる『釈迦』の70ミリ復元方法の検討は困難を極めることとなった。

(2) 日本における70ミリ映画文化史

1950-1970年代の国内発行文献から『映画年鑑』『キネマ旬報』『映画技術』(現『映画テレビ技術』『映画撮影』『合同通信』)などの映画雑誌を主な対象として70ミリ映画に関する記事収集を終えることができた。また、(1)の対象とした4作品、スタンリー・キューブリック監督作品『2001年宇宙の旅』およびシネラマ映画の製作・公開時の『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』『日経新聞』『京都新聞』などの新聞紙を調査し、関連記事および広告の調査も行った。以上の調査から、1960年代初期には北海道から九州まで70館以上の70ミリ映画上映館が存在していたこと、そして配給・上映系統の関係からシネラマ映画と70ミリ映画、35ミリ映画が複雑に混在しながら上映された各地固有の受容状況があったことなどが明らかとなった。本調査結果の一部については、後述の小論『NFCニューズレター』と『NFAJニューズレター』に記した。また、地域ごとの受容状況については、基盤形成研究後の調査課題としたい。

(3) 欧米での70ミリ映画文化の保存と受容の現状

本調査では、日本で70ミリ映画の上映環境を再構築するために必要な情報収集を目的に、ノルウェー映画協会が隔年開催しているオスロ70ミリ映画祭をはじめ、オランダのフィルムアーカイブであるEYEフィルムインスティテュートの70ミリ上映、ロンドンの70ミリ映画常設館「プリンス・チャールズ劇場」、ハリウッドで70ミリ映画を上映しているアメリカン・シネマテークの「エジプシャン・シアター」などを主な対象とし、70ミリ上映のバックヤードも含めた現地視察やヒアリング調査をおこなった。これらの視察を通して、現存する上映可能な70ミリプリント約15作品17プリントの状態と映写状況、上映プリントの材質および音システム、各館の映写機および機器、フィルム検査器、フィルムの保管方法、上映プリントの所蔵先、映写技師の体制やスクリーンの大きさ、映写機材のメンテナンスなど、安定した上映に必要なすべてを複数館で確認することができた。本調査結果は次項(4)の および に反映し、その一部は後述の小論『NFCニューズレター』に記した。また、現在の70ミリ映画よりも大型映画であるIMAX70ミリの上映館であるオーストラリア・シドニーのIMAXおよびロンドン・英国映画協会のIMAXにおいて行われたクリストファー・ノーラン監督作品のIMAX70ミリ版上映の視

察を通して、ノーラン監督作品の70ミリフィルムとIMAX70ミリフィルムとの画質比較をおこなった。これにより、とりわけ『ダンケルク』に関しては、映像の画質に関してもIMAX70ミリが70ミリに対して格段に秀でていることが明らかとなった一方で、『インターステラー』までの作品は、こと画質に関しては大きな違いが感じられなかったことから、フィルムストックの特質やポストプロダクションの違いも考慮すべき重要な点であることが実体験としてわかった。

(4) 日本国内での70ミリ映画文化の保存と受容にむけた課題

本課題のうち、70ミリ映画フィルムの最適な保存法(検査や保存の機器含む)、映写に必要な機器や環境、については、NFAJ映画室の協力を得て、所蔵70ミリフィルムのリストアップ、70ミリ映画の上映・検査に必要な機器等のリストアップとこれらの収集、所蔵70ミリフィルムの状態検査、所蔵70ミリ映画の試写までを本研究の2年目までに終えることができた。その結果、70ミリ映画のうち、映写に特殊レンズを使用しなければならないウルトラパナビジョン70方式で製作された70ミリ映画以外は、プリント状態さえ良好であれば、同館での上映が可能な状況まで整えることができた。それをふまえ、2年目の10月にNFAJ所蔵のアセテートベースで磁気トラックの70ミリフィルム『デルス・ウザーラ』の上映会を開催し、2回の上映を通して、参加者からも70ミリフィルム本来の映像・音表現への衝撃の声を得ることができた。さらに3年目には、欧米各国で上映されていた『2001年宇宙の旅』ニュープリントを海外から借用し、当館所蔵フィルムにはなく上映経験もないポリエステルベースの70ミリフィルムでDATASAT方式サウンドでの上映を、12回無事に終了し、鑑賞者からも満足の声を得ることができた。70ミリ映画全盛時に使用されていたアセテートベースで磁気トラックの70ミリプリントと、ポリエステルベースでDATASAT方式という現在の70ミリニュープリントのどちらも上映会成功の実績を築くことができたことから、本研究の「70ミリフィルムによる70ミリ映画の上映が日本国内で再現できる状況を形成」という目的を概ね達成できたと言える。

また、70ミリ作品の復元方法についても、日本映画の第1回70ミリ映画作品でありオリジナルネガの検証も可能な『釈迦』を対象として、2パターンの復元案をまとめることができた。具体的には、オリジナルネガの詳細な検証と並行して、『釈迦』をフォトケミカル工程のみで復元する場合に必要なスーパーテクニラマ70用のレンズをフィルムメーカーやラボの協力を得て世界を対象に探したが、すでに使用可能なレンズは無いことが判明したため、デジタルを介した復元プランを第1案とし、第2案はレンズを作成して行う場合のフォトケミカル案とした。以上の2案は、復元を実施する際の体制を前提に、著作権者、ラボ、音のデジタル復元専門家とて調査結果をすりあわせて合意の上にとまとめたものである。しかしながら、その実現には予算と企画組織も含め大きなプロジェクトを構成する必要があり、予算調達も含めて実行できる場合は、デジタル復元およびアメリカでの70ミリプリントの作製となり、最低2、3年はかかることも明らかとなった。そのため、当該作品の復元については、本研究の次のステップとし、本研究では当初の計画通りに事前の調査および体制整備までで終えることとした。

以上の成果をふまえ、上記の各目的をおおむね達成することができ、本研究の最終目標である「国内に現存する70ミリ映画について、保存体制を整え、上映環境や復元方法についての基本的な提言をまとめる」こと、「70ミリ映画の国内上映を可能とし、媒体固有の芸術表現の再現を取り戻す」ことも達成することができたと考える。

5. 主な発表論文等

〔その他〕

富田美香「ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント 製作50周年記念『2001年宇宙の旅』70mm版特別上映」報告」、『録音』222号、2019年3月、2-8頁。

富田美香「ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント 製作50周年記念『2001年宇宙の旅』70mm版特別上映 シネラマ映画『2001年宇宙の旅』unrestored 70mmフィルム」、『NFAJニューズレター』3号、2018年10月、12-13頁。

富田美香「連載 フィルムアーカイブの諸問題 第99回 ユネスコ「世界視聴覚遺産の日」記念特別イベント「特別上映会 甦る70mm上映『デルス・ウザーラ』」とその後に向けて「第12回 オスロ70mm映画祭」報告」、『NFCニューズレター』133号、2017年10月、7-8頁。

ホームページ等

「甦る70mm上映『デルス・ウザーラ』」とその後に向けて「第12回オスロ70mm映画祭」報告

https://www.nfaj.go.jp/wp-content/uploads/sites/5/2019/01/NFC133_p7_8.pdf

6. 研究組織

(1) 研究分担者 なし